

それではヘブル書 12 章 5 節～11 節まで先ずは通して最初に読ませて頂きます。『⁵そして、あなたがたに向かって子どもに対するように語られたこの勧めを忘れていません。「わが子よ。主の懲らしめを軽んじてはならない。主に責められて弱り果ててはならない。⁶ 主はその愛する者を懲らしめ、受け入れるすべての子に、むちを加えられるからである。」⁷ 訓練と思って耐え忍びなさい。神はあなたがたを子として扱っておられるのです。父が懲らしめることをしない子がいるでしょうか。⁸ もしあなたがたが、だれでも受ける懲らしめを受けていないとすれば、私生子であって、ほんとうの子ではないのです。⁹ さらにまた、私たちには肉の父がいて、私たちを懲らしめたのですが、しかも私たちは彼らを敬ったのであれば、なおさらのこと、私たちはすべての霊の父に服従して生きるべきではないでしょうか。¹⁰ なぜなら、肉の父親は、短い期間、自分が良いと思うままに私たちを懲らしめるのですが、霊の父は、私たちの益のため、私たちをご自分の聖さにあずからせようとして、懲らしめるのです。¹¹ すべての懲らしめは、そのときは喜ばしいものではなく、かえって悲しく思われるものですが、後になると、これによって訓練された人々に平安な義の実を結ばせます。』

前置きをしましたけれども、今日のテーマは『子育て』であります。子供を産んだこともない、育てたこともない私が子育ての話を皆さんにするのはどうかな、とも思うのですけれども、私がこれから皆さんにお分かちしたいことは、私の言葉ではありません。神の言葉です。そして私の経験から話をしようとしているのではなく、聖書に書かれている様々な子育てを経験した人たちの言葉でもあり、また彼らはその神の言葉に従って成功した者もあれば、またその言葉に従わずに失敗した者たちもおります。そんな事例も取り上げながら、実に今日でこのテーマを語り切ることは出来ませんので、2回に分けて『子育て』をテーマに話して行きたいと思います。既に子育てを終えてしまった人も中にはいるでしょうし、子供を育てたことのない人も、まだ結婚すらしていない人もいるでしょうし、でもこれから結婚し子供が与えられるかもしれません。それにまた孫が与えられるかもしれません。ですから是非まだ遅すぎる話ではありませんし、今から皆さんが聞くことは多分衝撃的なことでもあり、非常にもしかしたら子育てにおいて失敗した人たちにしてみれば、とても重苦しいかもしれません。それでも手遅れということはありません。私もこのことを話すのに全く資格がないわけではありません。なぜならば牧会というものは、牧師というものは、子育てに通ずるからです。パウロという人も独身ではありましたが牧会者であって、そして彼は霊のお父さんとして父親のように、また母親のように教会の 1 人 1 人に対してねんごろに接して、そして教会を育ててきました。監督の資質として、牧師の資格としては、自分の家庭をおさめる人であるということも明記されております。ですから牧師は、理想的な父親でなければいけません。そしてすべてのお父さんは、牧師のようであればならない、羊飼いのようであればならないということも併せて皆さんにはお伝えしておきたいと思いますので、今からかなり踏み込んだ話をします。ですけども^{ひとごと}他人事と思わずに、また自分が責められているように思わずに、この正しい聖書的な子育てというものを皆さんがしっかりと学んだならば、そのことをまた伝えることも皆さんの務めでもあり、ただ後悔するだけではなくて、悔い改めを持って新しい世代のために、また教会には沢山の子どもたちが集まって来ていますから、親でなくてもここは神の家族の共同体です。信仰の共同体ですから、是非そうした子供たちのことも覚えて、そして同時に父なる神様と私たちは父と子の親子の関係にあるということもこの箇所からも教えられておりますので、そのように子育ての話はしますけれども、霊的にも多く得るところがあるかと思えます。

まず皆さんにお伝えしなければならないことは、“主の懲らしめ”という、これはあまり好ましく聞かえないかもしれませんが、「^{つげ}躰」というふうに訳しても良い言葉です。主の懲らしめ、主の躰。父親として子どもを躰ける時に、この“懲らしめ”という言葉を使います。または、これは「訓練」というふうにも訳されています。5 節にある“懲らしめ”という言葉は 7 節の“訓練”と実は同じ言葉です。子供を懲らしめること。単純に懲罰を与えるだけではありません。訓練すること。『子育て、躰』がここでのテーマであります。そしてその際には、6 節に肉体的な懲らしめも必要とされるというこ

とです。それは“むちを加える”という言葉であります。カギ括弧の中の言葉は箴言 3 章からの引用であります。ですから、これは古代からの子育ての原則でありまして、新約聖書のヘブル書が書かれた時代も今から 2000 年前の話ですけれども、さらに遡^{さかのぼ}って 1000 年。今から 3000 年前の子育て。これが、この原則が今カギ括弧の中で読んでいる箴言 3 章 11~12 節の引用であります。古めかしく思うかもしれませんが。時代錯誤しているというふうに思うかもしれませんが、御言葉は永遠に変わりません。真理はいつの時代でも真理です。決して古びることありません。近代の、昨今の子育て論。これと聖書の子育て論というのに大きなギャップがあるかもしれません。「聖書の子育て論は時代には合っていない。現代人にはそぐわない。」と思って御言葉を軽んじる人たちもいますが、『わが子よ。主の懲らしめを軽んじてはならない。』これは他ならぬ主の懲らしめですから、神様の子育て論です。専門家の、近代の児童心理学者や教育家の、プロフェッショナルの子育て論と、神様の子育て論。これは勿論比較にもなりませんけれども、私たちはどちらかという、そのような巷^{ちまた}で流行^{はやり}っている、巷で権威のある、そのような世俗の子育て論にもしかしたら耳を傾け過ぎていて、主の懲らしめ、主の訓練、主の子育て論にはあまり目を留めてこなかったかもしれません。実際に懲らしめの中には、肉体的な罰も含まれる。それは“むち”というふうに言いましたが、英語では特にこのような“むち”のことを「スパンク」とも言います。「尻叩き」とも日本語で言います。ただ日本語で言う「尻叩き」というのは、どうも戦中の軍隊にあった尻叩き。木刀とかで尻を叩く。皆さんもそのような世代かもしれません。学校では先生が竹刀か何かで尻を叩く。そういう体罰のあった時代に皆さんは育っているかもしれませんが、そのような尻叩きとはちょっと違います。聖書的な尻叩き、スパンクというのは、お尻に勿論痛みを加えるわけですが、それは決して怪我をさせたり、または怒ってイライラからフラストレーションから与えるものではなくて、あくまで躰によるものであると。訓練が目的であって、そして逆にむちを与えないことは、体罰という言葉を使うともしかしたら誤解を生んでしまうかもしれませんが、聖書ではハッキリ体罰の必要性については語っておりますので誤解を恐れずに言っておきますけれども、スパンクというものを控える者はむしろ主の懲らしめを軽んじていて、ないがしろにしている、逆にそれを差し控えてしまうことによって様々な問題・トラブルを引き起こしていくんだということをまず知って頂ければと思います。

聖書的に子供を懲らしめないと、訓練しないと、躰けないと、どういうことが起きていくかと言いますと、まず家庭に混乱が生じます。秩序の乱れが生じます。家庭内で崩壊が起こってきます。そしてその結果親は子供に常にフラストレーションを覚え、親はそのうちに疲れていきます。もう育児放棄したくなります。その結果何が起こるかという、社会にまでしわ寄せが行きます。家庭において子育てがうまくいかないと、聖書的な子育てを行っていないと、必ず社会にも弊害をもたらしていくということを、その悲劇を私たちはこれまで見てきておりますし、また私たちはもしかしたらそのような悲劇の中で加害者でもあり、また被害者でもあるような、そんな時代に私たちは置かれているのではないかと思います。

日本において「団塊の世代」と呼ばれる人たちがおります。これはアメリカでは「ベビー・ブーマー」と言います。ほとんど同じような世代です。日本で言う段階の世代というのは 1947~1949 年の第一次ベビーブームの時代に生まれた人たちのことです。日本の首相の鳩山さんとか、皆団塊の世代です。有名人で言えばビートルズとか、または最近世界的に有名になった村上春樹とか、そういう人たちが皆団塊の世代、アメリカではベビー・ブーマーと呼ばれる世代です。アメリカのベビー・ブーマーは厳密には 1946~1959 年生まれの人たちのことを指します。ベトナム戦争があって、反戦運動をしたような人たち。多分この中の多くの皆さんも団塊の世代かもしれませんし、近い世代だと思います。ヒッピーの世代です。私が通っていたカルバリーチャペルはその時代に生まれましたけれども、フリーセックスだとか、ロックンロールだとか、ビートルズ世代です。アメリカではジョージ・ブッシュ元大統領、またクリントンさんとか、その時代が皆ベビー・ブーマーの世代であります。

その時代の人たちは、実は聖書的な子育て論から離れてしまって、その世代の親の人たちの話をしているんですけれども、聖書的な子育て論を軽んじてしまって、その時代に流行っていた子育て論、世俗の神様抜きの子育て論に走ってしまって、その結果生み出された世代。これがアメリカのベビー・ブーマーの人たちでもあり、また日本

の団塊の世代の人たちでもあるということをお皆さんに覚えて頂きたいと思ひます。

どういふことかと言ひますと、日本の団塊の世代の人たちは、アメリカのベイベー・ブーマーの親の人たちと全く同じよふな育てられ方をしてきました。どんな育てられ方かと言ひますと、子供には体罰は与えないと。スパンクなんか、これはまさに児童虐待であると。そのよふな教えを説いて、その教えが世界中に広がっていきました。その教えを説いた人は、ベンジャミン・スポックという、スポック博士として有名だと思ひます。スポック博士の子育て論というのは、団塊の世代の人たちなら知っているとと思ひます。ベイベー・ブーマーの人たちも勿論知っていると思ひますが、そのスポック博士について。この人はアメリカの小児科医であつて、初めて子育て論に精神分析学を取り入れた人であります。勿論この人はちょうど団塊の世代、ベイベー・ブーマーの前の世代ですけれども、ベトナム戦争に反対して平和運動家としても活躍したというよふに言われていますが、この人が1946年に、ちょうど団塊の世代の人たちが生まれた時代です。その1946年に出版した『スポック博士の育児書』というもの、これは邦訳されて日本語訳は1966年に出されておひますがけれども、その『スポック博士の育児書』というのは世界的なベストセラーになりました。42か国語に翻訳されて5千万冊販売されて、聖書の次に売れた本だとも言われておひます。その中に革新的なメッセージがあつたというのです。その革新的なメッセージというのは「自分を信じて下さい。あなたは自分が考えるよりはるかに多くのことを知っていると。」「団塊の世代の人は聞いたことがあるかもしれません。子供が泣いても即座に抱き上げないだとか、厳しさと躰を重んじる子育てのやり方に伝統的なこれまでの尻叩きとかスパンクをするといった子育てではなくて、乳児とのスキンシップを、愛情を示すことの重要性も説いたわけです。ただ、子供とは添い寝をしてはいけなひ。別の部屋に子供は寝かせなければいけなひとか、添い寝をすることは否定したりもしておひましたけれども、いずれにしてもその『スポック博士の育児書』というものが1966年に日本に紹介されました。その時、その本を訳したのは東大医学部の高津忠夫教授という人で、小児科医だったんですけれども、その人が日本にこの本を紹介して医者の中で、また知識層の中で、インテリ層の中でこの育児書が一世風靡して、皆この『スポック博士の育児書』をまるで聖書の如く信じて、それに従つて自分たちの子供を育ててきました。そしてその育てられた子供というのが私であります。団塊の世代ジュニアです。30代半ばから40代にかけての親たち。その『スポック博士の育児書』というのは1980年には、厚生省が小林登東大医学部教授の指導のもとに『母子手帳』の方にこの教えをしっかりと導入して、日本人はこの母子手帳もまるで子育てのバイブルの如く受け入れていったわけです。ただそのベースとなつておひるのは、この『スポック博士の育児書』であります。

結果どういふことが起きたかと言ひますと、アメリカでは、実はこのベイベー・ブーマーたちは30人に1人は獄中で刑を受けています。ベイベー・ブーマーの30人に1人は牢屋に入つたことがある、刑に服したことがある。アメリカ史上最悪の世代というものが、このベイベー・ブーマーの世代であります。日本の団塊の世代はどのよふのかと言ひますと、実際にはいろいろな統計がありまして、これも皆さんにいくつか紹介したいと思ひますがけれども、1つは2002年のNHKの性調査、セックスの調査が行われまして、その中で「13歳未満とセックスがしたいか。」NHKが質問する質問なんですけれども「あなたは13歳未満の子供とセックスをしたいと思ひますか。」調査は性別年代別で「してみたい。」「どちらかと言へばしてみたい。」「どちらかと言へばしたくない。」「したくない。」「実際にしたことがある。」「無記名」の6つの項目がありました。そして、結果「してみたい。」のトップが50代の成人男性です。団塊の世代です。「実際にしたことがある。」これは20代とほぼ同率であります。そして、さらに少し時はさかのぼりますけれども平成12年の読売新聞の朝刊で駅の構内での暴力行為の調査が発表されました。それによるとJR東日本での平成11年度の駅員や乗務員への暴力行為の件数は162件で、そのうち警察沙汰になつたのは88件であるという。その中で、最近はよく“キレル”とか、“キレル若者”ということが言われますけれども、実際に20代では25人。30代では29人。40代では33人。そして50代では39人ということ、一番キレやすいのは若者ではなくて、50代の団塊の世代であるということが、読売新聞の朝刊の一面に載りました。また朝日新聞の2001年の記事ですと、若者の殺人の数よりも団塊の世代の殺人数がトップだということが発表されました。これも朝刊の一面になりました。戦後の強盗の発生件数は、1948年が3,878件で最高でピークでありました。これは現在の発生件数の2倍以上であります。そ

の1948年というのは、大体70歳の方が若いころ最も強盗が多かった時代と言いますけれども、でもそれは戦後間もない時代ですからある意味で食糧難で仕方がない部分もあったかと思えます。ただそのような戦後から、もう戦後ではない、ある程度経済成長を遂げて物が豊かになって、それほど貧富の差も顕著でなくなった時代、1956年以降からの強盗発生件数を見ますと、1960年の2,762件がその戦後の安定して来た時代の最高件数となっています。その時代というのは勿論団塊の世代の若い人たちの時代であります。今のは強盗の発生件数の話です。

そして、強姦に関しては、レイプに関しては、1958年4,649件が最高で、勿論これは団塊の世代の話であります。2003年の犯罪件数は、レイプ事件に関しては256件です。ですから団塊の世代が若い頃のレイプの件数というのはそれから比べると18倍以上です。この他強制わいせつもう言うまでもないと思います。それもまた今の50代の団塊の世代が当然トップです。痴漢だとか、わいせつ行為。これも50代がトップで、ですから殺人にしても、強盗にしても、強姦にしても、わいせつ行為にしてもすべて団塊の世代がデータから見ますと最悪だということです。この中に団塊の世代の皆さんがいるので、ちょっと言いづらいのですけども、皆さんは最悪の世代だと今言っているのです。そして、その最悪の世代に育てられたのが団塊ジュニアの私であります。

私の若い頃は、家庭内暴力、校内暴力、勿論そんな親に育てられたからこんなふうになってしまったという言い訳はしませんけれども、このように呪いが連鎖の如く次の世代にどんどん及んでいるわけですが、その原因として今一つ私が皆さんにお伝えしているのは、この『スポック博士の育児書』であります。でも残念ながら今の時代でも、このスポック博士の育児論というものは日本の親たちにはまるでバイブルの如く、聖書の如く良いものとして伝わっております。実際に何が問題なのか、今簡単にご存知のない方にもある程度の概略を伝えたいと思いますので、ただ団塊の世代の皆さんであれば、もう直接その書物を読んでその通りに育ててきたとか。またアメリカではそのものを実際にベビー・ブーマーの親の世代が読んで、このように育てられてきたというようなことも経験されていると思いますので、現役世代には説明の必要性もないと思いますが、ただ「あまりそんな話は知らない。」と言う人たちのために、具体的にどのようなものなのか。そんなに詳しく話す事はしませんけれども、この『スポック博士の育児書』というのは、特に簡単に言いますと「すべての人間は良い人たちで、生まれながらに善である。」所謂性善説のようなものです。その性善説というのは誤解のないようにして頂きたいと思えますけれども、所謂儒教の性善説とは違います。「人は本質的には善であって、放っておいて悪を行うことはない。」という楽天主義的な性善説であって、結果的には子供の好きなように、子供の個性を生かして、自由放任主義というもの。抑制されない自己表現というもの。そういうものが導入されてきました。その前の世代は、子供は体罰を持って躱けるものであると。それに反論して、特にアメリカではスパックということが、親に対してはかなり厳しいことをされてきましたので、それに対する反発とまた賛同というものが起こって一世風靡をして、「子供にそんな手をあげてはいけない。それは児童虐待である。」ということで、厳しい懲罰、訓練を伴う子育てというのは否定されて、むしろそのような体罰・スパックは児童虐待であるというふうに見なされてしまいました。ただ1974年には、このベンジャミン・スポック博士は、早くも自分が説いた育児論から引き出された自由放任主義、また抑制されない自己表現という育児論、それはもう30年前に発表したのですが、30年後にその結果をスポック博士は見て、自分の育児論を否定しました。間違っていたということをして1974年に既にスポック博士は認めました。これは『ミルウォーキー・ジャーナル誌』というもので1974年に自分の育児論から引き出された自由放任主義、抑制されない自己表現。「個性を大事にしましょう。そんな懲罰・体罰・スパックは子供には必要ありません。」という結果、30年後その子どもたちが育って、現実を見たら子供たちは非行に走って不良化していたと。これは自分の招いてしまったことであるということ素直に認めて、謙遜に認めて、それを公に発表したのです。それは勇気の要ったことだと思いますが、残念ながらその博士が認めた見解というのは日本の母子手帳には反映されませんでした。今でもまだこのスポック博士の教えに基づいて「子供は生まれながらに本質は良いものである。」悪くないんだと。「だから体罰なんかいけない。スパックなんか、とんでもない。それは児童虐待である。」と、そのように教えてきたわけです。そして、今でもそれが残念ながら日本では染み付いています。勿論アメリカでもそのことを認識している人たちも大勢いるわけではありません。ただその結果が、ベビー・ブーマーのさんさん燦々たるもので

あり、団塊の世代の人たちのその犯罪率というものの中にも否定出来ない数字として記録されてしまっているわけです。

聖書の育児論というのは、全く違っておりまして、むしろ博士が児童心理学を初めて小児科として子育てに導入したわけですが、その児童心理学というのは勿論フロイトの精神分析学から来ていまして、神様を抜きにした世俗の教えであります。しかし彼らは専門家気取りで、「子育てにおいてはそんな体罰・懲罰・スパイクはいけなんだ。それは虐待だ。」と言って、これまでの伝統的な、すなわち聖書に基づいた子育て論を全否定してしまったんです。しかし、聖書の子育て論、これは今へブル書 11 章で見ている箴言の教えもそうですけれども、まずは「人は生まれながらに罪人である。」というところからスタートしていくのです。だからこそ懲らしめが必要である。だからこそスパイクが必要であるということです。

詩篇 51:5 に、これはダビデが、子育てにおいて痛く失敗した父親ですが、ダビデが大変な過ちを犯して、不倫の罪を犯し、そして不倫相手を謀殺してしまったという、その罪を告白して詠んだ悔い改めの詩篇です。『ああ、私は咎ある者として生まれ、罪ある者として母は私をみごもりました。』これが、先ずは聖書的な子育て論の起点であります。子供は生まれながらに罪人であるということです。スポック博士は「子供は生まれながらに本質は善であって、放っておいても悪は行わないのだ。」と。「子供の良いところだけを認めてあげましょう。悪いことをあまり言っははいけません。もっと褒めなければいけません。」と、聞こえは良いですが、しかし聖書は『子どもは生まれながらに罪人である。』まさに精子と卵子が受精した時点から既に子供は罪の性質を持つということを言っているんです。「それは時代錯誤している聖書原理主義です。」と非難されるかもしれませんが、私はそのような非難は一向に介しません。むしろ神の育児論に私はしっかりと基づいて、自分にも子供が与えられればそのように子供を育てていきたいと思ひますし、また教会においても聖書の言葉をベースにここに集まる神の子どもたちを育てていきたいと願っております。その中で忘れてはいけな基本中の基本は、人は生まれながらに罪人であって、その罪の性質は、これは墮落の性質として植え付けられた、所謂原罪、original sin というもので、性悪説とは違ひます。これは混同しないで下さい。儒教の説く、孟子が言うような性善説とか、荀子が言うような性悪説とは違ひますから、そこは誤解しないで下さい。聖書は性善説も性悪説も説いておりません。そうではなくて、聖書では「人は皆生まれながらに罪の性質を負って生まれてくる。」と、原罪というものを説いております。そして、その結果私たちは罪を犯すから罪人になるのではなくて、罪人だから罪を犯すということでありまひます。私たちは別に子供に嘘をつくことを教える必要はありまひません。嘘をつくことを子どもに教えずに、子供はいつの間にか嘘をつくことを行っておりまひますし、子供に自己中心になることを教える必要はありまひません。如何にしてオモチャを独り占めにするかということをおあなたは教える必要はありまひません。子供はもうオモチャを独り占めにすることを教えずに行っておりまひます。子供に如何にしてキレることをおあなたは教える必要はありまひません。子供はいくらでもキレることを自ら率先して行っていくようになりますので、それがまさに人は生まれながらにどんなに小さい純真無垢だと思はれる、私の天使・エンジェルだと思ひている赤ちゃんでも罪の性質を抱えているんです。その罪の性質を抱えた子供を育てる上では、この神の育児書が絶対に必要不可欠であって、特に今日のテーマは、その子育ての中で多くの誤解や物議を醸してしまうかもしれませんが、そこには必ず肉体的な罰ということ。それは英語で言うスパイク”spank”、また尻打ちというもの。それが伴なうということ。それが必要とされるということ。これは私の言葉ではありまひません。世の中の児童心理学の専門家が何と言おうと「それは児童虐待です。そんな事は必要ないんです。」と言ひても、これは神の言葉として是非聞いて頂きたいと思ひます。牧師の言葉でもなければ、私個人の言葉でもないです。これは神の言葉として皆さんに厳肅に受け止めて頂きたいと思ひます。

先ずその神の育児書の中から、特に箴言がそのことを多く語っておりまひますが、13 章 24 節を開いて頂きたいと思ひます。『むちを控える者はその子を憎む者である。子を愛する者はつとめてこれを懲らしめる。』むちというのは、所謂スパイク、尻叩きです。もしおあなたが自分の子供を愛しているならば、むちを控えてはならない。尻を叩くことを、むち打ちを控えてはならないと言ひているのです。ただ、むち打ちと言うと背中を叩いたりとか、手を叩いたりと思ひ

かもしれませんが、お尻を叩いて下さい。お尻がスパックをする上で一番相応しい神様の定めた場所、よく英語では **divine spot** と言うんですけれども、日本語に訳すと「神的な箇所」ということで、一番お肉があるところですから怪我のない箇所です。背中だとか、腰だとか、勿論腕だとか、顔、これは障害を与えてしまう、怪我を負わせる可能性がありますから、怪我を負わせる可能性が少ない、最も可能性が低い、そのお尻を、勿論怪我をさせる目的ではありません。痛みを与えて、ハードなレッスンを与えることによる躰です。そこを打つということです。そして、そのむちもどんなものを使ったらいいのか。聖書はそのことまであまり詳しくは触れておりませんが、教会にも置いてある『**チャイルド・トレーニング**』という本があります。これは皆さんにもお薦めしたいと思いますので、そこにむちに良い素材。どのような大きさのものをを用いたらいいのか。その辺も詳しく書いてあって非常に実用的だと思いますので、お薦めしたいと思います。『**チャイルド・トレーニング**』という本がありますから、子育ての真っ最中の人も、終えてしまった人も、これからの人も是非読んで頂きたいものです。いずれにしてもそのむちです。スパック、尻打ち、それは手で打つものではないということも知って下さい。必ずむちを使うんです。必ずスパックするためには、スパック棒というものを使います。むちの場合もあります。よくアメリカではウッド・スプーン”**wooden spoon**”という木製のスプーンを使います。スパック棒というものが置いてありまして、子供が届かないところとかに置いてありまして、それをお父さんが持ってきて躰ける時には使うわけです。お尻を叩くために使うのですけれども。日本で昔行われた、戦中などに行われた木刀を使うだとか、竹刀を使うとか、そういうものではありません。怪我を負わせないようなものを使って、道具を使って、とにかくむちに準ずるものを用いると。むちその物でもいいです。ただし、手を使わないということが大事です。聖書では、親の手というのは愛情を示すための手であります。あなたが手をあげる時に、子供はぶたれるんじゃないかと思わず目を閉じてしまうとか、思わず顔を背けるとか。それは問題であります。あなたの手は子供をしっかり抱き締めてあげる。ぶつのは手ではないのです。むちです、道具です、スパック棒です。とにかく怪我を負わせないような物で、それをを用いると。子供が大きくなると、小さいうちは簡単なものでも痛がって泣いたかもしれませんが、小学生ぐらいになるとそんなの平気みたいな顔になりますから、その都度段階的にアップして頂きたいと思いますが、いずれにしても手は使わないということです。手は愛情のシンボルです。むちは懲罰のシンボルです。ですから、むちを見るだけでも子供は悪いことをすることを差し控えます。あなたの手を見て、ぶたれるんじゃないかと恐れを抱く、怯える。これは大問題です。

エペソ 6 章には、父親に対して神様は「**子供たちを怒らせてはいけません。**」と語っています。怒らせてはいけませんということは、子供を躰ける時に、むち打つ時に、スパックする時に、尻打ちをする時には、怒りながら子供を打ってはいけませんということです。フラストレーションの中から、苛立ちの中から、今日は会社で上司にあんなこと言われたから、今日は妻からあんなことを言われたから、腹いせに、八つ当たりの如く、ストレスのはげ口の如く子供を叩いてはいけません。それは躰ではありません。それこそが児童虐待に通ずるような体罰です。私の言っている体罰はあくまで躰であります。そこには怒りだとか、イライラだとか、フラストレーション、ストレスというものは全く入る余地がありません。冷静に子供に対して「何が悪いのか。」そのことを説明した上で、これは神様が命じられて聖書の中に書かれている神様の方法として、子供が何を言おうと、泣き叫ぼうと、言い訳をしようと、断行するべきものであります。これも後にまた**箴言**の聖句から皆さんにお伝えしたいと思います。あなたが子供のことを愛して止まないならば、心からケアしているのであれば、将来を案じて心配しているのであれば、あなたはむちを控えてはいけません。必ず子供がもし言葉で言っても聞かないならば、同じことを繰り返したならば、有無を言わずにスパックして下さい。でも多くの人は「それは可哀想です。」と、スポック博士の教えに基づいて、日本の母子手帳に基づいて、「それは良くないことです。むしろ児童虐待です。」と言っている人たちは、気持ちは分かります。でも、彼らの本音も分かります。その本音というのは、子供と向き合いたくないだけです。子供と対決するのを避けている、逃げているだけです。「そんなことを言ったら子供にも嫌われるかもしれない。そんなことをしたら自分も面倒だ。会社でも疲れている。もう子供とまた感情的になって向き合うのが嫌だから、スパックじゃなくてテレビでも見てなさい。ビデオでも見ていなさい。ゲームでもしていなさい。」お菓子を与えたり、おもちゃを与えたり。スパックをすることは避けて、子どもと向き合うこ

とは避けて、テレビやビデオやゲームに子守りをさせてしまう。その背後にあるのは、ただ子供と向き合いたくない。面倒臭い。対決が嫌なんです。子どもからも嫌われたくない。逃げているだけなんです。そのことを私たちは知っているはず。「でも、母子手帳にはそう書いてあるんです。あの児童心理学の権威である世界的に著名なスポック博士がそう教えているんです。」と言いつつ訳すかもしれませんが、心の中では分かっているはず。それは良くないんだと。

聖書は今お読みした**箴言**では、私たちはつとめてこれを行うと。**箴言 13 章 24 節**、もう一度読みます。『**むちを控える者はその子を憎む者である。子を愛する者はつとめてこれを懲らしめる。**』とあります。“つとめて”というのは、ヘブル語では“シャウハー”と言って「熱心に求める」または「早く求める」速やかに、すぐにというニュアンスがあります。間を置かずに、間髪入れずに。「後で」なんていうことはここには含まれません。「お父さんが帰ってくるまで。お父さんに叱ってもらいます。」とか、そういうふうに出てきたお母さんもいると思いますけれども「今度やったら次はないから。」とか。スパックする前に「お父さんが帰ってきたら。」とか、「今度やったら次はないから。もう私は本気で怒ってるのよ。」と、そのようなことを言ってなかなかスパックをしません。でも聖書はハッキリと“つとめて”、特にニュアンスとしては、間を置かずに、時間を取らずに、後ではなくてすぐにその場で速攻で対応しなさいと言っているのです。今度やったらとか、子供を脅してはいけません。子供を脅迫してはいけません。それは脅迫です。大人が子供に怒鳴りつける。これも脅迫です。その怒鳴りつけるという行為は、まさに虐待です。「親として威厳があるから、怒鳴ったっていいじゃないか。」と思うかもしれませんが、親が子供を怒鳴りつけるというのは威厳でも何でもありません。それは言葉による虐待です。躰ではありません。それはただの脅しです。子供はただ怯えるだけで、怖いから従うだけです。決して子供を怒鳴りつけてはいけません。脅かしてもいけません。でも、もし子供が1線を越えたならば、あなたは怒鳴ったり脅かしたりせずに、すぐその場で速攻で、後ではなくて、お父さんがじゃなくて、すぐその場でお母さんでも(勿論その場にお父さんがいればお父さんが)率先してむちを打つということ。これがここで教えられていることです。“つとめて”「熱心に求める」「早く求める」間を置かずに後ではありません。なかなか出先でスパック棒を持ち歩くということはないと思いますから、それは例外として、なるべく出来得る限りすぐその場で、どんなに忙しくても、子供が1線を越えたら子供を先ずは人前ではなくて、子供と1対1になって別の部屋なりへ行って、他の人の前ですと子供の自尊心を傷つけますから、先ずは子供と1対1になって「何が今いけなかったのか。」そしてそれに対しては子供がどんな言い訳をしても必ずスパックをするということです。スパック棒がなければ手でしなければいけませんけれども、まあ手でしないで頂いて後で必ずスパックをするということです。そして言い訳は絶対に許されない、妥協はしない、すぐに行動する、すぐに対処する。これが大事です。そして首尾一貫していく。矛盾がないということです。言っていることがコロコロ変わるのでは、子供はあなたの言うことを尊重しません。機嫌の良い時、悪い時があったら、これも子供には伝わりません。常に首尾一貫している。矛盾がないということです。誰の前であろうと、子供と2人きりの時であろうと、不特定多数の大勢の人たちがいようと、教会の中であろうと、首尾一貫してコンスタントであるということも必要です。**箴言 19:18** を開いてみて下さい。これは私の大好きな神の子育て論です。『**望みのあるうちに、自分の子を懲らしめよ。しかし、殺す気を起こしてはならない。**』望みのあるうちに、まだあなたの子供に希望があるうちに。10代、20代、ヤングアダルトとか、「もう希望がありません。絶望的です。」と思うかもしれませんが、希望のあるうちに。そして、殺す気を起こしてはいけない。ただ、この“殺す気を起こしてはならない”というところは、実際にいろいろな聖書の写本がありまして、英語の欽定訳聖書 King James version では、この“しかし、殺す気を起こしてはならない。”というところは、次のように訳出しています。直訳しますと『**彼が泣いても、あなたの魂は容赦してはいけない。**』“彼が”というのは、「子供がいくら泣いても、あなたの魂は彼を容赦してはならない。」私はこの欽定訳 King James version は、公認本文という最も原典に近い本文を使って訳出していると思いますので恐らくその方が原典に近いというふうに思っていますけれども、いずれにしても“殺す気を起こしてはならない”これは当然のことです。そのように他の訳では訳しておりますし、日本の口語訳、新共同訳ではそのように訳していますけれども。写本によってはその部分を「泣いても容赦してはいけない。」というふうに訳していま

す。いくら子供が泣いてあなたを慕って「もう二度としません。」とるるる涙を浮かべて憐れみを乞うようにしても、「お父さん大好き、お母さん大好き。」なんてことを言いながらも、何とかしてスパックを免れるようなことを言ったとしても、容赦はならないと言っているんです。子供は言い訳することに長けております。プロです。言い訳をしてあなたにスパックをさせない。あなたが懲らしめることを差し控えるということの子供は上手にやってのけます。子供がやっていることは何かというと、あなたをコントロールして、あなたを操作しているんです。“マニピュレーション” manipulation と英語で言います。子供が泣いて「もう次から絶対しません。約束しますから叩かないで下さい。」と、「スパックしないで下さい。」と、「お母さんのことが大好きなんです。お父さんのことが大好きなんです。」と言っても、そんなことに騙されてはいけません。それはあなたの子供があなたを操作しようとしているんです。人心操作をしようとしているんです。子供はあなたが思う以上にスマートです。悪賢いです。純真無垢なあの表情に騙されてはいけません。天使のようなあの笑顔に騙されてはいけません。子供は生まれながらに罪人です。罪人だからそんなことは簡単にやってのけるんです。聖書は「泣いても容赦はするな。」と言っています。二度としないと、約束しますと言っても容赦はするなと言っています。むちは必ず与えなさいと。

でも中には「二度としなければ、結果的に良いじゃないですか。もう二度としないのならば、わざわざ痛みを与えなくたって、懲らしめを与えなくたって、むちで打たなくたって、スパックしなくたっていいじゃないですか。」と思うかもしれません。でも是非知って頂きたいのは、子供はむしろしっかりと線引きをされて、境界線を与えられて、その中で守られて生活するという必要としているんです。分かりづらいかもしれませんが、具体的なイラストレーションとして、聖書の中にエズラという人がいます。律法学者です。そしてまた他にもエズラと共にバビロン捕囚から祖国に帰ってエルサレムを再建しようとして立てられた指導者たち、大祭司ヨシュア、また総督のゼルバベルという人たち。彼らはエルサレムを再建しようと祖国に帰ることを許されました。バビロン捕囚の後の話です。神殿を再建したんですけれども、でもそのエルサレム神殿が再建されても、イスラエルの民は自由にそこで礼拝することはまだ出来ませんでした。何故出来なかったのか。彼らには脅威があったからです。どんな脅威かと言うと、敵がいつ攻め入るかもしれない。安心して自由に礼拝出来なかったのです。なぜならば、エルサレムにはまだ城壁が建て直されていなかったからです。町は完全に破壊尽くされていました。神殿は、町の中心は再建されましたけれども、そのエルサレムを囲む壁はまだ再建されていませんでしたので、いつ敵が入ってくるかもしれぬ。安心して気兼ねなく恐れなく自由に神様を礼拝するという事は、まだ出来なかったのです。そこでネヘミヤという人が立てられて、エルサレムの城壁を再建するという工事に取ります。その辺はエズラ記とかネヘミヤ記を読んで頂くと詳しくは書いてあります。何故こんな話をしているかという、壁があることで境界線が設けられる、線引きがなされることで子供は安心して守られた環境の中で神様を自由に礼拝出来るようになるということです。そうでない限り、あなたによってしっかりと守ってもらえるその壁が、セーフガードが、その超えてはならない境界線という線引きが、あなたによってなされない限りは、子供は安心して神様を礼拝出来なくなるということなんです。そのような壁、線引き、境界線、boundary。それは何かと、霊的に言うとそれらはライフスタイルです。子供のそのライフスタイルというものが程度確立されていなければ、エスタブリッシュされていなければ、子供は安心して自由に神様を礼拝することは出来ません。子供が持つ1つの判断基準、価値基準。これらがしっかりと子供の中に確立されていなければ、そのような線引きがなされていなければ、子供は安心して自由に神様を礼拝することは出来ません。ですから子供がいくら泣こうと、わめこうと、言い訳しようと、愛らしいエンジェルのような懇願する目つきであなたに何とかして罰を与えられないことを願い求めても、それを聞いてはなりません。あなたはしっかりと線引きをして、それは妥協は出来ない。しっかりと線引きをして、子供の中にライフスタイルを、子供の中にしっかりとした価値基準を、判断基準をあなたは置いてあげる必要があります。首尾一貫した妥協のない線引きをあなたは与えてあげる必要があります。そのためには、むちを差し控えてはならないということです。そうすれば子供は安心して信仰生活を送っていきます。神様を自由に礼拝して行くことが出来るようになります。

残念ながらクリスチャンホームの多くは、子供が神様を自由に安心して礼拝出来ない状態になっています。それ

は何故か。あなたが壁を作ってこなかったからです。あなたがクリスチャンの親として線引きをしっかりとこなかったからです。一貫した、首尾一貫のコンスタントな矛盾のない、子供の言うことに一一二転三転しない、子供に人心操作されない、そのような確固たる聖書的な子育て論をあなたが実施してこなかったからです。その結果が今なんです。箴言22章15節も開いて下さい。『愚かさは子どもの心につながれている。懲らしめの杖がこれを断ち切る。』愚かさ、これはまさに罪です。子供の中にある頑なさ、反逆心、生まれながらにあなたが教えなくても嘘をつきます。生まれながらに自己中心でオモチャもお菓子も分かち合うこともしません。独り占めをします。いくらでも感情を苛立たせて、キレて癩癩を起こします。全部あなたが教えなくても彼らはそれを率先して行っていきます。自発的に行っていきます。それらは彼らの中につながれている、これはまさに染み付いている、植え付けられている、切っても切り離せないような状態でつながっているということを言っているわけです。それが聖書的な育児論の子どもの性質、本質というものであります。愚かさです。

スポック博士は、それとは反対のことを言いました。「子供は生まれながらにその本性は、本質は善であって、放っておいても悪を行うことはない。」と。日本の母子手帳も皆それに基づいて、日本のお父さん、特にお母さんたちは、それに基づいて子供たちを育ててきたかもしれませぬ。また孫もそのように育てようとしているかもしれませぬが、それは非聖書的です。このスポック博士の考え、または児童心理学というものを受け入れてしまいますと、何が起こるか。社会における悲劇です、弊害です。子供は、人間は皆生まれながらに善とすると、放っておいても悪は行わないとしますと、矛盾が生じます。なぜならば、放っておいて悪を行う人がいっぱいいるからです。「おかしい。この教えは矛盾している。」と、スポック博士はそのことを認めて、素直に謙遜に誤りを認めて、それを公に発表したとは言われていますけれども、そのことは真偽も言うはやすしですから分かりませぬけれども、いずれにしても発表したと。これは事実です。ただ、残念ながらまだそのことを私たちは聞いていないと思いますし、聞かされていないと思いますし、まだまだそのスポック博士の教えは厚労省も国が支援をして、何故国がそれを支援し続けるのか。その理由もまた後に触れたいと思いますけれども、そこにはビジネスがかかっています。利権があるのです。国がそのことを把握していないはずはありません。スポック博士の教えが、母子手帳のベースがどんなに危険なものかは、国も知っています。厚労省も知っています。でもそれを変えないのはなぜか。利権が伴っているからです。それはさておいて、その教えに基づく矛盾があると言いました。人は生まれながらに善であると言いつつも悪が行われている。では、それをどのように理解したらいいのか。その矛盾をどのように解消したらいいのか。何故人は善であるはずなのに、あんなに悪いことをするのか。凶悪犯は何故存在し得るのか。何故彼らはあんなことをしてしまうのか。「それは彼らが病気だからです。病気だからあんなに悪いことをするので。人は生まれながらに善ですから、放っておいても悪いことをするはずがないのですが、悪いことをしてしまうのは矛盾ではないんです。それは病気だからです。」と説明するのです。何らかの精神疾患です。いろいろな凶悪犯がありますが、彼らは精神分析を受けますと、精神科医によると「病気なんです。犯罪者ではなくて病人なんです。」と。それがスポック博士の説いた教えに基づく結論であります。社会はそのように考えるようになります。人が何か悪さをすると、凶悪な犯罪を犯すと、倫理に反するような逸脱した行為をすると、「それは罪ではなくて、病気なんです。」と主張するようになります。「病気だから、当然治療が必要です。」と。「風邪を引けば、当然優しく丁寧に病人に対しては私たちは接していきます。犯罪者にも同じようにしなくてははいけません。彼らにはリハビリが必要なんです。」と。「更生施設が必要なんです。」と。

でも聖書は言います。それは病気ではなくて、罪だと言っているんです。教育によってリハビリをする、再教育をするということを社会はするようになります。「私がこんなことをしてしまったのは、親が私をこんなふう育てたからです。社会が悪いんです。私はいじめを受けました。不遇な幼少期を過ごしたのです。だから私はこんなふうになってしまって、こんなことをしてしまったんです。私が悪いのではありません。病気なんです。」と。一度言い訳をし始めると、子供はそれにだんだん長けてきますから、言い訳しか出来ない人間になっていきます。そしていつでも自分が犯してしまった罪を人のせいにして、「それは私の過ちではありません。私の失敗ではありません。私の罪ではありません。私には何の責任もありません。」と、常に逃げて回る、自己回避する、自分と向き合わない、責任回避する

ような人間になっていきます。自分が一番可愛い。自己愛性〇〇とか、そういう専門用語がありますけれども、でもそのような社会は、今悲鳴をあげています。

聖書はその問題のある社会に対して唯一の手だては、**子供をむちで打つことである**。単純明快です。スパックをすれば良いんだと言っているんです。これは私の言葉ではないということを、もう一度繰り返しておきます。私の独自の子育て論でも何でもありません。これは3000年前の**ソロモンの言葉**でもあります。また2000年前の**ヘブル書**の記者の言葉もそのことをサポートして、支持しております。神の言葉として、聖書の言葉として、今の病んでいる社会に必要なのは精神分析学ではありません。抗うつ剤でもありません。薬物ではないのです。単純明快にスパックです。肉体的な罰を与えるということです。それは児童虐待でも何でも無いということをもう一度強調しておきたいと思えます。

箴言 23 章 13～14 節を読みます。『¹³ **子どもを懲らすことを差し控えてはならない。むちで打つても、彼は死ぬことはない。** ¹⁴ **あなたがむちで彼を打つなら、彼のいのちをよみから救うことができる。**』と。ここでもむち打つてもスパックしても死ぬことはない。そして、それをすればあなたの子どもをよみから救うことができる。“よみ”というのは勿論地獄のことも指しますが、よみというのはまさに暗い牢獄のような世界のことを言います。閉じ込められてしまう世界のことで、二度とそこから出ることが出来ない世界のことをよみと言います。ヘブル語では“**シェオル**”と言って、ギリシャ語で言う“**ハデス**”のことも言います。もうそこに入ったら二度と出られない世界。地獄の待合室のようなどころですが、それは文字通り“ハデス”または“シェオル”というところを指すとも取れますけれども、二度と出ることのできない牢獄からも子供を救い出すことが出来る。または解放することが出来る。それは唯一スパックです。むち打つことです。肉体的な罰を与えるということなんです。尻を打つことは、スパックすることは、子供に、あなたの子供に2つのことをします。

1 つは、あなたの子供を罪悪感・罪責感から解放することが出来ます。犯罪者の心理の中に「自分を捕まえて欲しいから犯罪を犯す。」という人がいます。最近連日取り上げられていますが、のりピー(酒井法子)という元アイドルが話題となっております。彼女は言いました。「捕まえて欲しかった。」捕まえて欲しかったという言葉は、犯罪者の多くが漏らす言葉であります。捕まえてもらうために、自分を止めてもらうために犯罪を犯し続けるということ、犯罪者はします。ちょっと信じられないと皆さん思うかもしれませんが、それはどのように生じていくのか。「誰かが私を罰して欲しい。罰してもらうことによって私の積もり積もったこの罪悪感から解放してもらいたい。」と。最初は子供は小さな嘘をつき始めます。でもその嘘に対してあなたは親として何もせず、面倒くさいから、向き合うのが嫌だから、感情的になりたくないから、子供に嫌われたくないから、ちょっとした嘘やちょっとした反抗をあなたは見過ごして、無視していきます。忙しいから、そんなことにいちいち付き合ってもらえないからと。そのうちに子供はどんどんエスカレートしていきます。ちょっとした嘘でも子供の中には罪悪感・罪責感が生じていくんですけれども、それをあなたはそのまま放置して、放任してしまうのです。さらに子供はその罪悪感・罪責感から逃れたいが為に、早くそのことを親に罰せられて本当は解放されたいのですけれども、意識的にせよ無意識的にせよ子供はどんどんその罪を繰り返す、そしてその罪をさらにエスカレートして、学校で人の物を盗ったり、お店で万引きを試みたり、テストでカンニングを試みたり。でも、そのことについてあなたは気付きませんし、気付いたとしても特別対応をしません。ただ怒鳴りつけて、ただ叱りつけて、ただ殴るだけで、特別聖書的な子育てをいたしません。その結果子供はどうなるのか。最近の子供はもう薬物に蝕まれております。薬物依存は芸能人の間に今浸透しているだけではありません。私たちが信じられないほど若い世代にも身近なものとなっています。小学生にまで薬物の魔の手は伸びています。高校生中学生は当たり前です。私も団塊ジュニアとしてシンナーで育ちました。そのことで完全に脳がいかれて、歯がぼろぼろになって、おかしくなって、焼身自殺をしたような人たちは私は知っております。陸橋から飛び降りて、高速道路に飛び出して死んだような人たちもいます。高い木に登ってそこから落ちてしまった。そんな友人たちもいます。薬物は身近なところにあります。子供のすぐ近くに、手を伸ばせばすぐ近くにあります。それらはお金も必要です。でも子供たちは、犯罪を犯して盗むなり、または女の子たちは売春をして、援助交際をして簡単にお金を作り出し

て、そして自分たちの欲望を満たそうとします。そして気が付いてみたらもうどうにもならないような状態で、完全に犯罪者となっております。大人として立派な犯罪者となっております。その大人たちは子供の頃から実は小さな嘘から始まって、小さな罪から、些細なことから罪を犯して、そのことを親にしっかりと向き合ってもらえずに、叱ってもらえずに、いい加減な扱いを受けてしまいましたから、彼らの中には罪悪感が募っていったのです。どんどんどんどん罪悪感が積み重なって行って、「誰か早く私を見つけて欲しい、罰して欲しい、捕まえて欲しい。」その犯罪者の心理はまさに、早く私をこの罪悪感から解放し欲しい。犯罪者は分かっているのです。子供たちは分かっているのです。それが悪いことだと分かっているのです。でも親が、大人が向き合うのが嫌だから、子供にも逆ギレされたくないとか、子供からも暴力を受けたくないとか、子供からも嫌われたくないとか、口を利いてもらえなくなってしまうとか、これ以上親子の関係を悪くしたくないからとか、いろんなことを言い訳にして親は向き合っただけで済んだのです。大人は逃げて来たのです。その結果が多くの犯罪者たちを社会に作り出ししまったのです。本を正せばスポック博士です。スポック博士は地獄に行くわけではありませんからそれは分かりませんが、それはこの世の教えを取り入れてしまった結果です。児童心理学を、精神分析学を取り入れてしまった結果です。神様を抜きにした子育て、哲学、子育て論。それがすべての諸悪の根源であります。あなたは親として子供にそのような罪悪感を持たせたまま何日も放置しないで欲しいと思います。何日も、何ヶ月も、何年も子供の中に罪悪感を植え付けたままで、それをどんどん募らせて、積み重ねていくような真似をあなたは親としてさせてはいけません。早く彼らを解放してあげる必要があります。そのためには間髪置かずに、面倒でも、どういうふうに思われても、どんなに泣きつかれようとも、逆ギレされようとも、スパックすることです、むちで叩くことです。そうすることで彼らは痛い思いをして、その場でその罪悪感から解放されます。スパックをしてあげて、大泣きすると思います。泣きわめくと思います。それでもあなたはしっかりとその後、愛に満ちた両手で抱きしめてあげて、そして愛していることを伝えてあげて下さい。赦したということ子供にしっかりと「これでもうあなたのやったことは罰せられたので、もう罪悪感を持つ必要はないんだ。もうよくよして、もう過去の自分の罪に縛られる必要はないんだ。もうこれであなたの罰は受けたから、もうそれで解放された。」ということを伝えてあげることが出来ます。いつまでもギルト・コンプレックスで、罪悪感に縛られたまま子供を放置することをせずに済みます。

もう一つスパックがすることとして、尻叩きが、お仕置きをすることが、子供に素晴らしい恵みをもたらすこととして、1 つは罪悪感から解放すること。もう一つは、親子の関係を回復することが出来ます。スパックをすることで、尻を叩くことで、親子の壊れかけた、平行線になっている、複雑になってしまった、もはや会話もなくなった、そのような親子の関係を回復することが出来ます。子供は大泣きします。でも先ほども言ったように、両手でしっかりと抱き締めて、アメリカ人だったらそこでキスをして、日本人もそうやって下さい。いずれにしても、そのようにして子供に「愛しているよ。」と、本当に赦してあげたということをしっかりと伝えることで、子供との距離はそこで一気に縮まります。「なんでこんなことをやったんだ。あれほど言ったじゃないか。また同じことをしたのか。なんて悪い奴だ。もうあなたは私の子供じゃない。」みたいな、そんなことをいくら言って怒鳴りつけて罵ろうと、何にもならないということを教えておきたいと思えます。いくらあなたが親の威厳を持って怒鳴りつけようと、スパックではなくて張り手で子供を殴ろうと、木刀で殴ろうと、私もそれはやられましたけれども、全然効果はありません。でもしっかりとあなたが**箴言 23 章 13～14 節**に書かれているように、**彼のいのちをよみから救うことができる**。本当に子供のことを愛しているならば、ケアしているならば、スパックすることを差し控えてはなりません。愛していない者は、そのようにいつまでもギルト・コンプレックスを与えてしまう。罪悪感に縛られたまま、それが積もりに積もって、「もう誰か捕まえて欲しい。」本当のところは、やりたくてやっているわけではないのです。酒井法子もそれを言っていました。彼女にも子供がいるわけですが、子供がいながら薬物中毒になることを望む母親はいないはずなんです。でも彼女の中にも、そのように育てられてきて分からないのです。甘やかされて、過保護で、個性を大事にしましょう、放任主義で、正しい聖書的なスパックを受けずに、顔を叩かれたり。学校でも体罰はまだ私の時代はありましたけれども、校内暴力も勿論ありました。でも、聖書的な子育て論に基づいて育てられなかった人たちは、罪悪感が取り去られることなく、それが積もりに積もって「早く

誰か助けて欲しい、罰して欲しい。そのことで私は解放されるから。」そのような悲痛を持って、やりたくもないことをやり続ける。「なんてひどい奴らだ。なんて凶悪犯なんだ。」と思うかもしれません。またはスポック博士の考えに基づいて「彼らは病気なんです、病人なんです。信じられません。」と。「でも、病気だから仕方がないですね。リハビリが必要です。」と。そうじゃないんです。彼らは罪人であって、彼らはまさに聖書的な子育てによって育てられなければならない人たちなんです。それを育てられずに、そのような子育てを受けずに大人になってしまった罪人なんです。

箴言 29 章 15 節。『むちと叱責とは知恵を与える。わがままにさせた子は、母に恥を見させる。』放任した、過保護にした子供は、問題児となって、非行少年となって不良化して、そして面白いことにここには**“母に恥を見させる”**とあります。父親ではないのです。母にです。なぜ母なのか。なぜお父さんではないのか。反逆児に対して、反抗的できかん坊に対して、あなたの夫は、お父さんは、こう言うでしょう。「この子はお前の子だ。」と。「お前の子供だから、お前が何とかしろ。」と。「仕事が忙しいのだから、そんなこと構ってられない。」と。仕事を持っているお母さんも同じです。お父さんの場合は、父親の場合は、恥を見ることを避けて、逃げて、仕事にかまけてしまいます。でも母親は違うのです。たとえ仕事を持っている母親でも、専業主婦でないパートタイマーでも、またはビジネスウーマンのような、キャリアウーマンのようなバリバリ仕事をこなしている母親でも、恥を見るのです。どこが違うのか。父親と、男とどこが違うのか。それは母親、女性というのは、男と違って男以上に傷を受けやすいのです。悲しみというのは、男が、父親が感じるものとは全くレベルが、質が違います。子供のことで受ける傷は、母親の方がもっと深いのです。男はいい加減です。忙しさにかまけて「それはお前の子だから。お前の血の方が濃いだろう。お前の方によく似ている。お前の親にそっくりだ。」とか、そんなことを言って簡単に逃げますけれども、母親はそうではないのです。女性とは違うのです。

それは聖書がそのことを証明しておりますけれども、もっと重要なことは **15 節に『むちと叱責とは知恵を与える。』**とありますが、むちだけではないということを最後知って下さい。**むちと叱責**、これは切っても切り離せない不可分なものです。両方必要です。むちと叱責。肉体的な体罰、スパック、尻叩きと、“叱責”が必要だと。これは「**訓戒、戒め**」とも訳せますが、ただ体罰を与えるだけではありません。ちゃんと言葉を持って正しいことを伝えてあげることが必要だということです。肉体的なスパック、尻叩きだけではなくて、言語的に言葉を持って、また霊的にしっかりその子供に説明してあげる説明責任が必要だということです。「なぜ私は今から、お母さんは、お父さんは、あなたに体罰を与えるのか、スパックをするのか、尻叩きをするのか、説明してあげます。」と。「フラストレーションから、イライラから、ムカついたから、ストレスがあって上司にこんなことを言われたからとか、近所のあの人にこんなことを言われたから、イライラしているから叩くのではないのですよ。」と。感情から、怒りから叩くのではないということをお子に伝えてあげる必要があります。「スパックをするのは、あなたを罪悪感から、罪責感から、ギルト・コンプレックスから解放するためである。スパックをするのは、尻叩きをするのは、あなたとの関係を回復して、もっとあなたと近い親密な関係になりたいからだ。」と。そしてスパックをしなければどうなるのか。それが大変な悲劇をもたらす。蒔いた種を刈り取るというのは、どんなに辛いことか。神様を侮ってはならないということをお言葉から教えてあげる必要があります。必ず罪を犯せば結果が伴うということ。このことを、リスクがあるということをお子に伝えてあげる必要があります。それが叱責ということです。体罰と叱責、これは切っても切り離せないものです。両方説明することと、むちを使うことです。手で叩いてはいけませんが、むちを使うということ、スパック棒を使うということは、これは必要なことです。

17 節に『あなたの子を懲らせ。そうすれば、彼はあなたを安らかにし、あなたの心に喜びを与える。』「私はもう育児放棄したいです。もう子育てノイローゼです。うちの 10 代の子供たちを早く家から追い出したいです。」と、そんな人もいます。そういう経験をした人もいます。あなたがむちを使って叱責を用いて子供を育てるならば、子供があなたに安らかな、平和な、平安な気持ちを与えてくれます。そしてあなたに喜びをもたらすと、素晴らしい約束がここにあります。多くの親は疲れています。スポック博士のおかげです、皮肉ですが。母子手帳のおかげで多くの親は疲れています。「どうしてうちの子は。生まれながらに性善説で、良いエンジェルなのに、どうしてなの。病気なのかしら。」と。「なぜ言うこと聞かないのか。なぜこの子は同じことを繰り返すのか。落ち着

きがないのか。集中できないのか。学校に行ってもいつまでも座っていられずに、授業中もあちこちふらふらしたり、勝手にふらふらと教室を抜け出したり、どうしてなのかな。」と。「おかしい。病気に違いない。」と。スパックをしないからです。

今若いお母さんであるならば、また教育現場にいる人であれば、よく知っていると思いますが、ADD と呼ばれるものがあります。ADHD というふうにも専門的に言いますが、教育現場では、子供が、小学生がじっとしてられない。授業中に私語を使って授業を妨害してみたり、または席から立ち上がってふらふらしてみたり、勝手に教室を取り出したり、そのようないくら注意しても全然落ち着きがない。それを ADD とか、ADHD とか、日本語では注意欠陥・多動性障害。障害、病気だというふうに言います。これは社会問題となっています。勿論スポック博士のおかげであります。日本の母子手帳のおかげです。先にアメリカが進んでいますから、アメリカの現状を言いますと、アメリカでは何百万人、小学生の 200 万人、300 万人、400 万人、500 万人がこの ADD、ADHD 注意欠陥・多動性障害を負っているというふうに言われております。言われているだけではなくて、毎日そのために薬を飲んでます。その薬は覚せい剤と同じ薬です。小さな子供が落ち着きがないから、薬漬けになって抑えつけています。「でも、それは傷害ですから仕方ありません。病気なんです。」と。『スポック博士の育児書』から、または日本ではその『スポック博士の育児書』に基づいた『母子手帳』の教えから、このような子どもたちが生まれてきました。「でも、それは病気ではないですか。心の病なんです。行動障害です。発達障害です。」と言うかもしれませんが、実はそういう原因というものは、それを障害・病気だと断定するだけの証拠は医学的にも何にもそれは証明されていません。原因は不明なんです。原因不明なのに、薬で抑えつけているのです。薬漬けにして、そのような問題児を落ち着かせているのです。これは私から見ますと、麻薬漬けと何ら変わらない。痴呆症で暴れだす年寄りを薬漬けで抑えろとか、格子の付いた病院で薬で抑えつける。それと全く同じことを小さな子供たちにしているのと全く同じなのです。実際には原因も分からないのに。ただ、原因は私には分かっています。それは罪です。(これでまたインターネットに出ますと大変な騒ぎになるかもしれませんが)ADD の子供だとか、ADHD の診断を受けたお母さんやお父さんに対して私が「その原因はあなたのせいだ。」と言えば、私は大変な反対を受けて、もう脅迫まで受けるかもしれませんが、私の言葉ではないのです。聖書では、子供をむちと叱責によって育てなさいと。そうすればあなたにも安らぎが与えられる。安らかになり、そしてあなたは喜びを持つことができますが、そのあなたの責任を放棄して、ハッキリ言いますと、もしあなたがこのことを知って聖書的な子育て論を実践すれば、私は ADD も ADHD も激減すると堅く信じています。薬なんか使わなくても大丈夫です。精神分析なんか受けなくても大丈夫です。リハビリなんか必要ありません。もし親が本気でこのことを信じて、少なくともクリスチャンが聖書の言葉に従って、額面通り神様が与えられたこの育児書にしっかりと目を留めて従順に従っていくならば、私は ADD も ADHD も克服出来ると思いますし、それを障害だとか病気だとか呼ぶことすら私は恥だと思えます。親として、教師として、教育者として、子供を病気扱いするのは、むしろ子供にとってそれは良くないことだと思えますし、子供を不幸にすることだと思えます。子供は病気でもなんでもありません。子供は罪人でしっかりとした躰が必要なだけなのです。反論もあると思えます。薬を使うとか、精神分析を全面否定して、そのような児童心理学者や精神科医のことを私はまったく馬鹿にしているわけではありません。彼らのやっていることはある意味で致し方のないことかもしれません。というのは、彼らは真理を知らないからです。薬の効果もあるでしょう。でも薬の副作用も弊害もあります。リタリンというものも使います。抗うつ剤も使います。副作用は計り知れないものがあって、そのように幼い頃から(リタリンも覚せい剤と同じです。)服用していけば、必ずと言っていいほど薬物中毒になります。勿論麻薬にも手を出します。抗うつ剤を飲んでる人たちがいます。クリスチャンでもいます。1 日でも早くやめた方が良くと思います。今の時代になって急に ADD や ADHD が急増したというのは、何を意味しているのでしょうか。聖書的な子育て論をこの社会が退けたからです。主の懲らしめを軽んじたのが私たちの親の世代、ベビー・ブーマーの親の世代であり、また団塊の世代であります。彼らは、日本の場合は特にキリスト教社会ではないので、そのままアメリカの影響を受けたわけですが、アメリカがそれをしてしまったのは、私は大変な悲劇だと思います。1960 年代からアメリカは今でも衰退の一途を辿ってお

ります。スポック博士が元凶だというふうに聞こえたかもしれませんが、元凶はアメリカ人が、多くの教会が、クリスチャンたちが、聖書から離れてしまったことです。アメリカ人のせいにしてはなりません。私たちは聖書を与えられています。ですから是非このことを私たちは、既に 3000 年前の**箴言**にこのことが教えられていますので、今の時代何を言われようと、専門家が何を言おうと「それは児童虐待である。スパンクなんてとんでもない。子供は生まれながらに善である。」なんていうことを聞かされても、私たちは動じてはいけません。日本人は権威に弱いです。「医者が言うから。その薬が効果があるから。」そんなことに騙されてはいけません。「学校の先生が何を言うから、教育委員会が何を言うから。」そんなことに騙されてはいけません。私たちは何千年も変わらない聖書の言葉に耳を傾けるべきです。今の専門家が言っていることは、もう何年もすれば全く翻って「それは間違いでした。」と平気でそんなことを、無責任なことを言ってやっつけてのけます。なぜ『**スポック博士の育児書**』が間違いであることが分かっているのに、日本の政府がそのことを母子手帳に 100%導入したまましているのか。それは実は、利権が絡んでいると言いました。次回に話したいと思いますが、薬のメーカーが、薬物を扱っているメーカーが絡んでいるのです。厚生労働省がなぜ変えないのか。薬を沢山使って欲しいからです。何故 ADD や ADHD の子供を抱える親たちが、その薬のことを否定せずに、むしろ効果があると思って推奨しているのか。実はその団体が、そのお母さんの多くが、そのような薬を使っているメーカーの支援を受けているからです。私たちが想像する以上に、この世界は墮落して、汚染されて、暗い世界であります。ですから是非そのことを私たちは把握しておかなくてはなりません。この社会が言うことは、神様から遠く離れた人たちの言うことであって、そこにはもっともっとドロドロしたおぞましい暗闇が潜んでいるということです。それこそが私は罪だと思えます。間違いが分かっているのに、子供たちにどんな影響があるのかも分かっているのに、利権のために、お金のために。精神科医も分かっています。楽なんです、薬を処方した方が。カウンセリングなんかやっつけられないのです、お金がかかるから。手間もかかるから。薬が手っ取り早いです。利権があります。私たちは騙されてはいけません。専門家が何を言おうと、子育てのエキスペートが何を言おうと、私たち一人一人を造られたお方が、創造者が何を言っているのか。何千年も変わらない聖書の言葉が何を言っているのか。このことに私たちは耳を傾けなくてはなりません。ちょっと語り切れないところがありましたけれども、予告したように第 2 弾を次回にまたお話ししたいと思います。ここで打ち切っておきたいと思いますが、是非考えて頂きたいと思います。

「**へブル書**の内容から全然今脱線しているようで、これまでの流れがどこへ行ってしまったのですか。」と。いきなり講解説教から子育ての主題説教に、テーマ別の説教に変わってしまったように皆さんは思っ、困惑した人も中にはいるかもしれませんが、とんでもないということを次回お話ししたいと思います。今までの流れをやはり意識しなければ、この子育てということも分かりませんし、子育てにおいて私たちが信仰のレースを全うするためには、やはり訓練が必要なのです。その訓練を与えるコーチは、父親なのです。最高のコーチは、お父さんのようなコーチです。父親がコーチをしている有名なスポーツ選手は大勢います。イチローのお父さん、チチローと言いますが、あだ名はチチロー。偉大な有名選手の影には常にお父さんというコーチがいる。若しくは、有名なコーチは皆その選手のお父さんのような、本当に優秀な常にトップを走るような選手を育てなければ、お父さんのように、子育てのように選手を育てなければいけない、訓練しなければいけない。これは**へブル書**のテーマから外れてはいけません。ですから、また次回にもその矛盾することはない、首尾一貫している流れを汲んだ話だということを、次回含めてお話をしたいと思います。では、今日はこれで終わりたいと思います。